

での記述があり、ともかく 1号機のトラブルには悩まされたと池亀氏は 1969 年発電準備事務所次長として赴任、その後 GE 社との原子炉購入に関しては責任者として東電側は長島副社長、契約担当に池亀氏がなり、さらに現場据え付けに関し GE 側との折衝担当となり、1号機の運転に関しても運転責任者になった。

そもそもこの GE 製マ - ク I 型原子炉はスペイン原発公社の発注によって製作されたモノで、スペイン仕様で設計され製造された原子炉で、日本向けの耐震構造ではなかった。

それがスペインでの建設現場の遅れから、急遽日本側に配置換えになったものだから、原設計での耐震設計では地震国日本の基準が合わず、結局、日本側で耐震構造にあう支持構造物の補強を行った。

それで内部空間が狭隘に成らざるを得なかったので構造物の内部を作業員がすり抜けるのに無駄な時間がかかり、内部での作業を阻害するばかりだった、という。

契約担当だった池亀氏は、フ - ル・タン・キ - の契約をしていたので GE 側は独断で工事を進め、東電側のクレ - ムは無視され、双方の間に立った池亀氏は大分苦勞していたようで、フ - ル・タン・キ - の契約を後まで悔やんでいたようです。

無事引き渡しを終え、昭和 46 年 3 月 26 日営業運転に入り、池亀氏もそのまま現場に残り 1号機運転の責任者になったそうで、故障が多く苦勞したようです。

その後本社に戻り原子力担当のセクションを昇り、最終的には原子力担当副社長に就任し、死者に鞭打つようですが、数々の事故隠し、資料改竄等々数々のスキャンダルがありましたが、原子力担当副社長の辣腕による強硬突破を謀った結果だったようです。

また 1号機は度々故障を起こしながらも、40 年間もだましだまし使い切った技術は大変なモノだと評価されています。

池亀氏の原子力界、東電内での信用度は絶大だったようです。

Q : 東電としては、地震、津波に対する安全基準の最大値をどの位に見積もっていたのですか？

A : 詳しいことは解りませんが、東電の HP では地震は関東大震災( M7.9)が最大であり、M8.0 以上はあり得ない。 津波は 過去の例からみて最大 5.6m としていた。

専門家の調査によると地震は最大 M8.0 程度、津波は最大波高 数 m 程度と結論付、安全対策は十分に執られている、としていたようです。

但し、改めて調査した結果、浜岡原発の近くに活断層が発見されたり、四国電力で唯一の原発である伊方原発は愛媛県佐多岬半島の根元部分にあたる地域にあり既に 30 年以上経つ、この佐多岬半島に並行するように我国最大級の活断層である中央構造線が存在しているが、建設後に断層が発見されたわけではなく、断層の存在を無視して建設したのだ。南海地震が懸念され、改めて伊方原発の存在が問われている。

原発事故後に「貞観地震・津波」が新聞紙上を賑わしておりますが、そのような固有名詞は歴史の教科書にはなかったとする人が大半でしょう。

この貞観地震(ジョウガン)というのは、1980 年代の半ば頃、東北電力が女川原発の増設に伴い、付近の地質調査をした結果、津波の痕跡を発見した。

従来 実施してきたボ - リング調査では直径 3cm 程度の穴での地質調査では津波の痕跡